

## 日本の中医学の発展を目指して

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 人間環境学専攻  
酒谷薫

日本中医学会は2010年に発足し、今年で10年という節目を迎えることになった。本講演では、この10年間の中医学の歩みを振り返りながら、日本の中医学はどうあるべきかについて考察する。

私は、北京の日中友好病院で脳神経外科医として勤務していた時に中醫師と知り合いになり、初めて中医学というものに触れた。そして、中医学には西洋医学にはないユニークな考え方や優れた治療効果に興味を覚え、中醫師とともに診療するようになった。その中醫師の一人が全小林先生であった。全先生は熊本大学内科学教室に留学した経験があり、日本語が堪能で西洋医学の知識も豊富であった。その後、中医科学院広安門医院の副院長を経て、最近、中国科学院の院士に就任された。彼は、SARSのとき以来、ウイルス性感染症に対する中医治療の研究を続け、今回のCOVID-19でも国家中医薬管理局専門家グループのリーダーとして参画し、大きな実績をあげられた。全先生は、この10年間の間、たゆまない努力を続けられ、中医学を大きく発展させたのである。

中国における医学の発展は経済発展とともにあるが、西洋医学だけでなく中医学も大きく発展した。私があることを実感したのは、昨年、北京中医薬大学を訪問した時のことである。この大学は北京市中心街から北京郊外に引っ越したのだが、学研都市といってよいほどの敷地内に近代建築が林立していた。そして、新しい学長（徐安竜先生）と面談したが、彼はアメリカ留学から帰国したエネルギッシュな科学者であった。彼の招待により深圳で開催された中医学関係の学会に参加したが、中国国内外で活躍する科学者が多く参加しており、発表内容も科学的なものが大部分を占めていた。中国政府がいかに中医学の発展に力を入れているのかよく理解できたのである。

このような中国は、中医学だけでなく、人工知能、ICT、ドローンなどデジタル技術では世界のトップレベルを走っている。重要な点は、中国はデジタル技術などの技術革新と一体化して中医学を発展させようとしている点である。日本の中医学もデジタル技術革新とともに発展すべきであると考えるのである。本講演では、我々が開発している中医学のデジタル化の一例について紹介し、日本の中医学の発展の道筋について考察する。